「アメリカ
……」もっと荘重に もっと全人類のために すべての人々の面前で語りたかった 反コロンブスはアメリカを発見せず 非ジェファーソンは独立宣言に署名しない われわれのアメリカはまだ発見されていないと

私のなかのアメリカ

❶世界をどう見るか❷アメリカ雑誌紀行❸アメリカを読む❹コラムニストの椅子

鮎川信夫

大和書房

私のなかのアメリカ

●世界をどう見るか●アメリカ横断紀行●アメリカが読む●コラムニストの椅子

鮎川信夫

大和書房

私のなかのアメリカ
一九八四年一月二五日初版発行

著　者　鮎川信夫　©1984
発行者　大和岩雄
発行所　大和書房
東京都文京区関口一―三三
郵便番号　一一二
電　話（〇三）四五一一
振替　東京六―六四二一七
本文印刷　信毎書籍印刷
製　本　東京美術紙工
装　幀　菊地信義
ISBN 4-479-68021-1
Printed in Japan

I　世界をどう見るか　5

世界の認識のしかた／日米ジャーナリズムの落差
日本のなかのアメリカ／アメリカからみた日本
軍備増強の実像／実戦力としての核兵器
通常兵器と核の限界／核の廃絶と世界戦争
欠落している実戦意識／社会主義の幻想
民主主義とは気分のいいアナーキー／ソ連の国家と人民
計画経済の破産／情報の読み違い
コミュニストの克服／アメリカのヨーロッパ第一主義は本当か
ヨーロッパのフィンランド化／経済の相互依存度と戦争の関係
教科書問題のなかのアジア／米・ソ・中にとり巻かれた日本
ソ連の強制収容所体験／現代インテリ層の混迷
一人一人の表現のメカニズム／失われた家族の原理
フィクションの退潮／危機感なき危機論
新しいイデオロギーの到来はあるか／他者が見えなくてもいい
アメリカの雑誌とのつきあい方／アメリカ社会の読み方

Ⅱ アメリカ雑誌紀行

亡命者たち
ソルジェニーツィンへの風当り
フランスの敗北主義
ラスキンのサルトル論
ポースト・モダニストの作家
ショックレー博士と黒人インタビューアー
〝ハーパーズ〟の再建
ポーリン対アドラーのキャット・ファイト
シェームズのレノン報告書の真相
ソール・ベローに「敵はいらない」
平等はどこまで実現されたか
「野心」は復活するか
アメリカの〝グランウォルド化〟に反対ー
ノーマン・ポドーレッツの「未来の危険」
ファローズの国家防衛論
ジャネット・クック事件の余波

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

V・S・ナイポールのイラン旅行記
アボット、メーラー事件、文学の犯罪性

Ⅲ アメリカを読む　127

テレビ・メディアの現況
核戦争とバンドエイド
米欧対立の深刻化
履歴書の嘘
ドルは本当に強いのか
老年とヘビー・スモーカー
教育の革命的変化
ロックフェラーの名画模造事業
ハーマン・カーンの大胆な予測
Fun City の文化の粋
ソルジェニーツィンと西側の知識人
ジョン・レノンの死と魔術

Ⅳ コラムニストの椅子 157

THE MOMENT OF TRUTH
怪談
少年非行と占領政策
麻薬不感症
東京ディズニーランド行
中国とゴルフ
『戦場のメリークリスマス』を観て
国家の現実と選択
世界のなかの日本
あとがき 206

私のなかのアメリカ

I　世界をどう見るか

世界の認識のしかた

……あなたは戦後間もない頃から、アメリカの雑誌をずっと読み続けてこられたわけですが、そういう行為を通しての世界状況の認識のしかた、あるいはものの見方の基本的なところからお話し下さい。

――もともと詩を書いてきた関係上、自分の詩の傾向もあるけど、初期の頃から英米の詩の影響を強く受けたということがあって、文化的にもアングロ・サクソン中心で英米文学に魅かれてきたと思うんです。しかし、戦争期には戦意昂揚の国策が強化され、だんだん外国文化の影響を排除するような形で、日本のナショナリズムが進んでいったんです。僕の場合は、はじめから海外の詩とか文学の影響が強かったので、なかなかそういう傾向に承服できませんでした。それで、どうしても西欧の文化の方が、心情的になじみやすいというか、知的にもピンとくる、そういう感じが強かったのです。それゆえ、情報というものの扱い方、世界を把握する方法、ものの見方、そういう根本的なところで、やはり英米人の考え方の影響を受けつづけてきたと思うんです。だからそれを抹殺しにかかるような形で発展していった日本のナショナリズムの影響を受けた文化、あるいはマスコミ、あるいは文学者の動向とか、そういったものに反発する傾向が自分の中にあった。例えばニュース一つとってみても、英米のニュースの方が情報を正確にキャッチしている。そういう感じが強くあったので、根本的な関心は外国の情報のほうに重点があったということなんです。端的にいってしまえば、同じマスコミでもどっちを信用するかということになるんです

けど、そういう情報システムの体質の違いを戦後の人は経験してないから、きっとわからないと思うんです。戦後の日本のマスコミとかジャーナリズムは、外国の文化をまるごと受け入れて消化しながら、たいして矛盾もなくやってきたというところがあるでしょう。ところが戦前の社会を考えてみると、外国の文化を受け入れる場合、大変な矛盾や抵抗があったわけです。実際の自分の生活とか、生き方とか、環境、職業等の各分野でそれを感じていたんですから大変です。戦後だったらなし崩し的に外来文化を受け入れてそこに何の抵抗もなかったけれど、それができなかったということ、はっきりと現実を支配している価値体系と対決するような形でやらなきゃならないという意識の二面性を初めから宿命づけられていました。戦後は開かれた社会ですから、そういう外来の情報を無制約的にどれだけ受け入れてもかまわないのだから、それが次第に普遍性をもって広がっていったということなんです。僕らが戦前出していた同人雑誌では、T・S・エリオットやオルダス・ハックスレイ、ミドルトン・マリ、マックス・イーストマン、W・H・オーデンなどを紹介していましたが、後期にはサルトルなども訳して出していました。白井浩司の訳で「部屋」を〝詩集〟という雑誌に出した記憶があります。

……戦前だったら、文学的なものはともかく、新聞、雑誌では、海外の文化に目を向けることはなかったわけですか？

――ほとんどなかったです。ただ間接的にはありましたけれどね。特に外国映画、英米仏のものは、かなりよいものが入ってきていましたから、それを通じて知ることはできました。戦時体制下でナショナリズムが強くなってからは、外国の文化情報は否定的にとらえてニュースされるん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だけど、われわれはそれをさらに裏返して逆に考えるようにしていたんです。

日米ジャーナリズムの落差

……戦後の日本の新聞、雑誌の、いわゆるジャーナリズムが、アメリカ文化を紹介していく、そういう形なり仕方なりにはもう四十年近くの歴史を経たわけですけど、第一次資料といえるかどうかはともかくとして、アメリカの新聞、雑誌等に表れた基本的な情報なり、記事の方向と、わが国のジャーナリズムの考え方の違い、そのへんの落差はどうなんでしょうか？

――それは答えるのが難しい。日本の社会もこれはこれなりに情報量はふえてるでしょう。そういうものを全部見てるわけじゃないし、情報処理の仕方がこれからの厄介な問題になると思う。アメリカだってそうです。雑誌王国という位だから、専門の雑誌はひどく分化しているし、総合的な雑誌もいろいろあって、その情報量というのは厖大なものですからね。日本だって細かく見たら、片よりなんてなくて、万遍なくいろんな考えがあるかも知れない。ただ日本の場合はマスコミの主流の方向が割合にはっきりしていて、中央集権性が強いのでアメリカよりはとらえやすい。アメリカは極端にいえば、政府の政策だけ見てたって何もわからない。極端な場合は政府だけが孤立してることだってある。例えばウォーターゲート事件の時なんか、政府は議会からも孤立し、各官庁からも孤立し、マスコミからは勿論孤立し、東部のエスタブリッシュメントというようなものからも完全に孤立していた。だから単純じゃない。政府というのはエスタブリッシュメントの代表みたいに日本では考えるけれど、そういうものじゃない。というのは政府というの

は大統領の任期も決っているし、そんなに長く続くものじゃない。エスタブリッシュメントであるにしても、一時的なものです。だから日米のマスコミの落差という場合は、むしろジャーナリズムで行動している人たちの考え方の落差を問題にした方がいいし、その方が大事だと思います。表面的な現象としては同じようなものといっていいんじゃないか。全部あるもの、日本という国には。さまざまな人がいるし、それが必ずしも目立った場所で活字になったり電波に乗ったりしていなくても、世界のあらゆる潮流が流れこんでいる。むしろそういう意味でいうと、あまりにも目うつりがして、すべての傾向が相対化されるから、今の日本のマスコミの、ジャーナリストというのは、自分のやっていることに割に自信のない時代ではないか。だから何をやっていてもこれが本当に確かなんだろうかという疑いを拭いきれない。例えば六十年代のいろんな運動、反体制運動、あるいはサブカルチュアの流れの文化活動なんかを活発にやってた人よりも今の人の方が、一見堅実な仕事をやっているようでいて、本当は自信がないんじゃないか。というのは、確定的な情報というものがつかまえ難い時代なんです。例えば現代史を書くとしても、過去のどの時代にもまして難しい。まず資料の整理だけでも大変です。何が一番大事かということがなかなかわからない。実際にその時代を生きた人のさまざまな証言の中から真実を探すより仕方がないけど、そういう意味でいったら、ほとんど何が何だかわからない時代だと思う。だからW・H・オーデンのいったような意味での公正なジャーナリズム——そういうジャーナリズムの公正さにいくらかでも信をおくとすれば、英米の場合は少なくともその根拠があったと思うけど、日本の場合は根本的にそれがない。なぜなら、日本の近代史には一貫した価値体系がないからです。

戦前、戦中というのは、今からみれば全く逆転した状態と言ってよいくらい違うからね。中曽根康弘を風見鶏なんていってるけど、日本のマスコミはいつだって風見鶏なんで、その時の勢利にしたがって強きにつくだけだからね。そういう意味からみれば、同じ近代でも、伝統がまるで違うんじゃないかという気がする。この間〝アトランティック〟という雑誌が一二五周年記念号を出したんですが、ソール・ベローを巻頭にすえて、J・ファーローズなんかが論文を書いてたけど、百年以上の歴史をもつ新聞、週刊誌、雑誌がいくつもあるんじゃないかな。だけど日本では、新聞なんかでいえば、百年以上の歴史をもつものもあるけど、方針に一貫性、連続性がないでしょ。時代の風潮によって、まるで手のひら返したように違ってくる。戦争中は軍国主義に迎合して、戦後は民主主義に迎合してという工合だ。だから百年といってもその重みを感じさせるものがなければ、戦後生まれだといっても変らない。

……基本的には戦後からようやく齢を数えられるということかも知れないですね。

――自分が所属する言論機関がやってきたこととか、方針とか政策、そういうものを正々堂々と正しかったといえる人はいないしね。それがいえればいいけどね。だからそういう場合、結局言論だって何だって風俗としてしかとらえられなくなる。その中にどれだけの真理が含まれていたかということは問題じゃなくて、あの頃はみんなこんなふうなことをいってたんだなという、それだけになってしまう。アメリカやイギリスでは、そういうことはない。やはりちゃんとした新聞、雑誌には、一定の方針なり、伝統なりがあって、それが根こそぎ奪われるということはない。ただ経済事情は厳しいから、経営的に行き詰まると、〝ハーパーズ〟にしても〝サタディ・レビ

ュー〃にしても、何度も廃刊が伝えられたりして、そういうところは冷酷無残です。〃ロンドン・タイムズ〃だって何度も危機に逢着した。日本の場合は大新聞がつぶれるなんて考えられない。銀行がつぶれるなんて考えられないとか、そういうものがある。だから中身は変ろうが、形だけはとにかく続いていく。ところがアメリカはそういうわけにはいかない。もう競争に負けたらおしまいなんです。銀行だろうが、出版社だろうが、百年以上の伝統があろうがなかろうが、だからそういうところが違う。

日本のなかのアメリカ

……最近の若い人向きのジャーナリズムみたいなところで、アメリカの雑誌の日本版というか、〃プレイボーイ〃を筆頭にかなりそういう傾向が出てきたんですが、これはどういうことなんでしょうかね。

――大衆雑誌なんか確かにそうだ。〃コスモポリタン〃なんかも出てるしね。マス・カルチュアの基盤が変ってきたといえるかもしれない。

……読者のアメリカ志向というのは、かなりはっきりしてるでしょうね。

――大衆レベルではそれが強いでしょうね、そういう意味でいったら、大衆の方が嗅覚的にファッションには敏感ですし、一番遅れてるのはインテリではないでしょうか。

……インテリには、アメリカに対して、従来の行きがかりとか、建前でしかアプローチできないというところがあるかも知れないですね。それに関連して、戦後の日本を通覧した場合に、アメ

リカとの関係が何といっても一番大きいわけですけど、日本にとってのアメリカ、アメリカにとっての日本という、そのへんの関係は、今の段階でどのようにとらえられますか？

――七年も占領期間があったんだし、その頃マッカーサーが日本人は十二歳だといったが、たいして反発もかわなかった。それが今では何歳になったのか知らないけど、とにかく少くとも経済の面では先進資本主義国のすべてをおびやかすくらいにまで成長してしまったことで、そういう意味では、敗戦後日本人は手に入れようと思ったものは手に入れたといっていいんじゃないか。しかし、日本には依然としてまだアメリカの保護国的な立場に甘えてぶら下っていた方がいいという考え方が残っていると思う。実際いえば、日本なんて経済的には都合のいい保護主義でやってきたんだからね、日本の産業で今のし上ってるんだって、一定の保護のもとに国内産業が栄えていったんだし、そういうものを伸ばさせまいとする力が働いていたら伸びなかったはずです。だからその保護される立場というものはそのまま頂いて、日本の国内についていえば少しずつ開放していったわけでしょ。いわば向こうは自由貿易体制で、そこにつけこんでいって、のし上ったわけです。そういう意味でいったら申し分のない成功ということがいえるんじゃないかな。ただ現在の日本が経済大国だということと、大衆の生活感情がそれだけ豊かになったかといえば、これは全然別の問題です。日本は確かにそこまでいったんだけど、それに付随した生活感情としてはどうか、これは別だと思うんです。

……国家レベルでの経済的発展と国民の生活感情との間には大分落差があるでしょうね。

――落差があるけど、もともとそれは主観的なものでしょ。うんと貧しい生活してても心が豊か

だということもあるし、結構贅沢な暮しをしてたって、心が飢えているというか、渇いているということもあるから、そこはなんともいえないけど、日本人はある程度の経済的な成果を達成してからの方が貧しくなったところもあると思う。

アメリカからみた日本

……例えばアメリカの側からそういう日本を見た場合、特に経済ということが一番大きいんでしょうけど、国民総生産とか、国民所得であるとか、ある種の統計とか数字に還元できる大きなメルクマールは、先進資本主義諸国でもトップに近くなってきたということはありますけれど、大衆レベル、あるいは生活レベル、実際の国民生活、労働条件の問題も含めて、余暇のとり方とか、そのへんのことは欧米と比べても、価値判断は別として格差があると思うんですけれど、そこまで日本を見る場合、アメリカなり、ヨーロッパなりがどの程度まで目を届かせているんでしょうか。

――一般にはあまり関心は高くない。日本に対する認識はまだ専門家レベルじゃないか。直接日本の企業と競争してぶつかってる労働者とか、そういう人たちはかなりな脅威を感じているだろう。自動車産業の労働者とか、それだって聞いてみれば、何も日本だけが悪いとばかりはいってない。自分達が悪いんだといってる人だっている。全てが日本車排撃でこりかたまっているかといえば、そんなことはない。アメリカはとにかく大きな国だし、いろんな人間がいるから、それに個人が必ず自分の意見を知的レベルに関係なく持ってる国だからね。だから日本人はそういう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com